

書評：

Billy K.L. So,
*Prosperity, Region, and Institutions in
Maritime China:
The South Fukien Pattern, 946-1368*
(Harvard University Press, 2000.)

岡 元司

著者の Billy K. L. So (蘇基朗) 氏は、1952 年、香港の生まれで、オーストラリア国立大学で博士号を取得後、シンガポール国立大学などの教壇に立ち、現在は、香港中文大学 (Chinese University of Hong Kong) の歴史系主任である。これまで蘇基朗氏の著書は、『唐宋時代閩南泉州史地論稿』(台湾商務院書館、1991 年)、『唐宋法制史研究』(中文大学出版社、1996 年) として中国語で既に我々は読むことができたが、今回、このうち前者の内容を一部組み込みつつ、五代十国・宋・元時代にわたる泉州を中心とした閩南地域の繁栄の全体像を英語で執筆したのが本書ということになる。

本書のタイトルにある “institutions” という言葉は、1993 年にノーベル経済学賞を受賞したダグラス・ノース (Douglass North) 氏の著書『制度・制度変化・経済成果 (Institutions, Institutional Change and Economic Performance)』(原著は Cambridge University Press から 1990 年に出版；日本語版は晃洋書房より 1994 年に出版) が意識されており、社会における「制度」(人々の相互作用を形づくるために考案されたさまざまな制約) の変化が、フォーマルなルールやインフォーマルな制約(慣習・伝統など)の複雑な相互作用によって起こることを論じた新制度派経済学の理論が参照されている。

以下、各章ごとに内容を紹介し、本書の特色について考えてみたい。

まず、“Introduction” では、(1) 10~14 世紀の

閩南における経済成果 (economic performance) をひとつの過程として見ることに、(2) 空間 (space) における経済成果、(3) 経済成果における制度 (institutions) が果たす役割の重要性、といった点が本書の主題として示される。そして主な先行研究として、蒲寿庚・泉州についての桑原隲蔵氏の研究、唐代から明代までの泉州の海上交易の盛衰に関する李東華氏の研究、唐から宋にかけての閩南経済についてのヒュー・クラーク (Hugh Clark) 氏の研究が挙げられ、その 3 人との相違点に言及しつつ、本書自体をそうした先行研究との学問的対話による産物として位置づけている。

続く本論の第 1 部「成功—中世閩南の経済サイクル」のうち、まず、第 1 章「946 年以前におけるフロンティアとしての閩南」では、隋唐時代から五代十国の閩の時期までの閩南地域の歩みが記される。唐代閩南の人口は大部分が農村のものであり、繁栄地域ではなかったこと、また同時期における灌漑プロジェクトの増加が必ずしも高い生産レベルを反映するものではなかったことなどが、クラーク氏の先行研究も参照されながら述べられる。それに関連することとして、^{イブン・} ^{クルダドベ} の言う “Djanfou” を、桑原隲蔵の泉州説ではなく、唐代に海上貿易センターとして繁栄していた福州に比定し、唐代閩南経済の農業的・地方的指向性を指摘する。そして、閩国の王氏政権のもとで、とくに王延彬によって海上貿易が奨励されたものの、その努力は過大に言われる程のものではないと論じる。

これに対して、続く第 2 章「946~1087 年における地域経済の^{離陸}」では、留從効・陳洪進が割拠した時期から北宋時代までにおける地域経済の根本的变化を取り上げる。この期間、閩南の農業生産はしだいに増加し、換金作物の栽培も進んだ。それらによる余剰が商業資本へと転化し、海上貿易に占める閩南の地位も福州を凌ぐようになった。ただし、この段階においてこの地域は、重要な輸出商品をまだ生産できておらず、外国商人の主たる関心は依然

として広州・杭州・明州にあったとされる。

しかし、1087年に市舶司が泉州にも置かれ、状況が大きな変化を見せる。これ以後の泉州の繁栄を明らかにしたのが第3章「1087年から1200年頃までの海上貿易と領域横断的繁栄」である。ここではまず、高麗・日本・南海方面との貿易、閩南人の海外渡航、地域内での消費拡大、海南島・広東・両浙・山東半島・長江流域との地域間取引について述べ、国外・国内ともに商取引の機会が顕著に拡大した様子をたどる。そして、輸入品の増加にくわえて、閩南からの輸出品がかなりの量に達するようになったとして、輸出入品目ごとに整理をおこない、また海上貿易による政府収入について従来の議論へのやや慎重な見解を示す。本章では同時に、この時期の閩南地域経済についても分析しており、農業の商業化傾向の表れとしてサトウキビ・餅米などの栽培、浙江・両広からの米の移入といった農業面について論じられるとともに、地域産業が海外および国内の市場で儲けの得られる商品を生産し始めたとして、織物・酒造・糖業・製鉄・産銀・製塩・造船といった諸産業の状況を明らかにする。これらを踏まえ、この時期において閩南の経済がきわめてバランスのとれた状態にあり、地域全体として前例のない繁栄を享受したとして、地域の視角から“cross-sectoral prosperity”と呼んでよいと論ずる。

第4章「経済的後退と地域権力：1200年頃～1276年」では、一転して、泉州の経済後退局面へと話題がうつされる。13世紀初めに地方政府が財政難に陥ったのが、その初めての兆候とされる。これについては土肥祐子氏がとくに宗室関係の支出を要因として強調していたのに対し、著者は、海外貿易の後退や土地税収入の減少を赤字の要因として捉える。そして、真徳秀や劉克莊の記述に見られるような、13世紀の第1四半世紀に泉州商人の多くが破産したり広州に移住するなどといった泉州衰退の要因として、地方官吏の腐敗、手に負えない海賊だけでなく、高麗の衰退（およびモンゴルの侵入）、日

宋貿易における中国商人主導から日本商人主導への変化、アンコール朝によるチャンパ併合、シュリーヴィジャヤの衰退といった外部市場の変化を指摘する。しかし、広州は海外貿易の繁栄を依然享受していた事実から、著者は、さらに地域経済における構造的な陥穽があったのではないかとの問題設定をおこない、13世紀初以後、地域の有力な一族に土地が急速に集中し、また、銅銭のたぐわえが消耗したことによって交易のリスクが増し、そうした状況のもとで閩南のエリートたちが、地方の政治権力に対する関心を強めることとなったとする。そのことは、閩南の地方官に地元出身者の率が高まり、南宋最後の年の泉州知事と市舶使は、いずれも泉州地元の人であったことなどを指摘する。

元代以降を扱ったのが第5章「新たな体制の下での繁栄：1276年～1368年およびそれ以降」である。ここではまず、蒲寿庚の存在を周囲の人物たちとの人的結合の中に位置づけて考察し、アラブ人の蒲寿庚が泉州の地域エリートたちのサポートなしに成功し得なかったことを明らかにする。そして13世紀末までに閩南の経済は回復し、泉州にはアラブ・ペルシア・インドなどの人々によるコミュニティが成立し、陶磁器・織物といった非農業の産業は繁栄を続ける。しかし、その一方で泉州の戸数は13世紀後半に激減し、港とそれ以外の地域との統合は欠如することになり、繁栄は少数のマイノリティによって独占されるようになった。そして元末、中央政府の権威の低下のもとでペルシア人守備隊の反乱がおこり、富裕・有力な一族は没落し、富商は他地域へ逃れることとなる。明代に入ると、貿易に対する制限的規則がもうけられ、また、琉球との関係で、福建市舶司は泉州から福州に移される。閩南では他に月港（漳州湾）や厦門といった新たな港も勃興したが、かつての泉州に匹敵する地位を占めることはできず、それはこの地域における“cross-sectoral prosperity”の全盛が過ぎ去ったことを示すのだと述べる。

続いて第2部「空間：地域システムとしての閩南」では、地域においていかなる経済的統合が見られていたかについての分析がおこなわれる。第6章「内的に統合された地域としての閩南」では、まず地域全体のセンターとしての泉州州城の地理的位置や泉州および漳州・興化軍における県の配置についての分析がおこなわれる。とくに州城のある晋江県に隣接する南安県の存在によって杭州・福州・明州・広州といった他の海港都市以上の凝集度を泉州が示し、中心地理論にもとづいてスキナー (G. William Skinner) 氏がモデル化した地域階層構造では南安県が別個の市場圏をもつはずであるとは適合しないことを指摘する。と同時に、県より下位の町については、製造業の町 (manufacturing town) のほとんどが都市から離れた周縁部に位置するとして、窯業の徳化県をその例として挙げている。また、沖積平野における市場町 (market town) が、二つのより上位の中心地 (higher-level central place) の間の海岸交通路に位置することが多いのに対し、安海鎮・太平鎮などでは直接の海上貿易をもおこなっていたことから、地域および長距離の二重の交易機能を果たす町が存在することにも注目している。これに続けて、閩南各州の戸数や郷・村・里の分布から、泉州および晋江県への集中度を明らかにするとともに、交通路や橋梁建設から地域間コミュニケーションにも論及する。そしてこれらの分析を通して、閩南を機能的に統合された地域として位置づけ、泉州を中心とした地域統合のプロセスが、スキナー氏による8つの巨視的地域の1つである“Southeast Coast (東南沿岸) Macroregion” (浙江南部～福建～広東東部) 内の他地域と同様の統合プロセスを示すとは限らないとして、むしろスキナー氏が詳述していない“subregion”の方を地域概念として用いようとしている。

つづく第7章「地域センターとしての都市泉州」では、泉州の都市形態学的特徴を分析する。ここでは、泉州城の地区に官衙、教育機関、寺観、モスク

などの配置が示され、また、地方志の「坊」に関する記載から、どの地区にどのような住人がいたかについてを間接的に明らかにする。さらに、県別の戸数をとくに福州と比較し、福州では附郭の閩県・侯官県の戸数が州全体の18%にすぎないのに対して、泉州では晋江県および僅か数kmしか離れていない南安県に州全体の戸数の60%以上が集中していることを指摘し、人口が農村地域に拡散している自制的・静的な福州の地域経済に対して、非農業的職業に従事する人口割合が多い泉州では、外的な富が長距離取引を通して追求されたとする。

そして第8章「地域の経済的統合：閩南における陶磁器輸出の事例研究」では、11世紀末から元末までの閩南における輸出用陶磁器の大規模な生産が取り上げられる。これについても地図上に窯の場所が示され、宋元時代の閩南の窯が海岸平野に集中しており、薪が平野部では枯渇していた明清時代との差異が指摘されている。また、閩南産の陶磁器の種類や特色が整理され、泉州の住人の6.5%以上が窯業からの収入に依存していたこと、また閩南に比べるとまばらにしか窯が存在しなかった広州・潮州・惠州など広東沿岸、および、11世紀以後は近くの越窯が衰退していた明州との相違が示される。

本書最後の第3部「構造：閩南経済の取引費用分析」では、取引費用の視角から泉州の商業を考察する。はじめに第9章「交易のパターン：商人、組織、知識」では、商人グループの類型、資本投下の方法や、海外貿易において自然・人的原因によるリスクをいかに計算するかについて整理し、そのうえで、中国の商慣行が、信用取引などに関して外国からの影響・刺激を受けていることを指摘する。また、とくに海外貿易のような複雑な商業活動においては、教育も積極的な役割を果たしており、海外市場についての知識が成功にとっての重要なファクターとなり、地図の編集や文人による地理書なども、そうした現象のあらわれと位置づける。さらに、シュリーヴィジャヤとの交易の事例の検討から、泉州の

商人がしばしば東南アジア島嶼部を訪れ、該地の知識を集積し、ビジネス・コネクションを築いたことが、取引費用を他の競争相手地域よりも低減し泉州の成功につながったとする。

ついで第 10 章「フォーマルな制度的制約：法、財産、契約」および第 11 章「インフォーマルな制度的制約：合理性、倫理、信仰および社会組織」では、商人の行動に対するフォーマル・インフォーマルな制約について、ダグラス・ノース氏の理論に言及しながら考察を試みている。まず第 10 章では、違法な取引と合法的な取引を比較し、合法的な取引の確実性が長期的ビジネス・プランニングを効果的にし、また合法的な商人としてのステータスが海外の取引紛争においても有利に働くなど、結果として取引費用低減に役立つことを指摘する。また、財産権や契約に関するフォーマルな法が強制的な役割を果たす——決して完璧に履行されたのではないにせよ——ことで、取引費用の低減を通して海上交易への誘因的役割をになったものと論じる。

他方、第 11 章では、信仰によって形成された精神モデルが意思決定に重要な役割を果たすとして、ノース氏の考えを参考にしながら、インフォーマルな制度が、閩南経済に果たした役割を検証する。その際、フォーマルな制度的枠組は概して国家的規模であるのに対し、インフォーマルな制度は、より地域的かつ文脈的であるとして、閩南に即した事例の検討がおこなわれる。まず儒教倫理と商業の関係については、余英時氏が注目した「勤」「儉」「誠心」のうち、とくに「誠心」を信用の価値との関係で重視し、また明清時代の商業書における忠誠の役割と同様の価値観が、南宋・元代においては出版物という形ではあらわれていないにせよ、閩南のように高度に商業化された地域で実践されていたとして、朱熹・真徳秀・王彝といった儒者の認識を通して明らかにする。また、信仰と商業倫理との関係についても、明清時代のような商業書による直接の証拠があるわけではないが、『袁氏世範』・『太上感應篇』の

記述や媽祖（天后）・顕惠侯（祥応廟）への信仰の事例などから、誠実・忠誠の倫理を強化し、悪行や欺瞞を抑制することを促す役割をもっていたことを指摘する。さらに、しだいに結合力を増すようになった親族集団も、その成員であれば大きな優位を享受できることになり、その相互信頼によって取引費用も減じられることになると述べている。以上のようなインフォーマルな制度が、海上交易における取引費用を低減させ、結果的に閩南の地域経済の繁栄を持続させることに貢献したと論じる。

最後に“Conclusion”で、著者は本書全体をふりかえったうえで、新制度派経済学のノース氏によって展開された「制度」に関するアプローチと、「地域」へのアプローチとの両者の長所を組み合わせることが、補完しあって強力な分析の枠組を作り出すことを強調している。すなわち、中国経済を均質な一体として概念化することは、スキナー氏やハートウェル氏の警告の通り建設的ではないことを述べると同時に、スキナー氏の空間的アプローチにも新制度派経済学の枠組の中に更に位置づける余地があることを提言する。こうした意図にもとづいて、工業化以前でありながらも高度に商業化された閩南という「地域」の長期的成長に、フォーマルそしてインフォーマルな「制度」的基盤がどのように提供されていたのかを考察したのが本書ということになる。

以上のような内容をもつ本書からは、評者自身、いくつものことを学ぶことができた。まず、宋元時代の「地域」研究として本書を見た場合、泉州を福州、広州、明州など他の海港都市と比較しようとする姿勢が鮮明であり、その点で、近年の地域社会史研究の事例の積み重ねの中で今後求められるであろう地域差異をどう理解するか議論にも、有意義な材料を提供していると言えよう。また、一部の先行研究とは異なり、泉州という都市を常に「地域」の広がりの中で捉え、諸産業や社会的階層構成とも関わらせて、閩南の繁栄を“cross-sectoral prosperity”として考察しているために、単なる点としての都市

の類型論に陥ることなく、わかりやすく提示された多くの地図の効果にも後押しされて、魅力ある地域像を描いていたように思う。それらの細微な分析が、スキナーの空間把握の問題点を説得的に提起することにもつながったように思う。

さらに、ノース氏の理論を参考に、「制度」が経済発展に果たした役割への考察を試みた第3部では、とくに第11章で、明清時代について分析の進んでいる商業倫理について、宋元時代なりの表れ方を閩南における思想・信仰から探り出し、単に儒教だけでなく、当時の日常的な倫理・観念との関連性も視野に入れて論じているのは、きわめて興味深い方向性であろう。

こうした点で、本書がたいへん刺激に富んだものであることは疑いないのであるが、その一方で、検討の不十分さを感じる部分も若干ながら含まれていたように思う。一つは、第4・5章で南宋末期や元代における閩南の衰退原因に鋭く切り込みながらも、たとえば、そこで鍵となった地域エリートの存在について、第3章などで南宋前半期やそれ以前にまでさかのぼって長期的に分析されれば、より説得力が増したのではないと思われる点である。

さらに、これとも関わるのであるが、第3部において個々に興味深い分析をおこないながらも、最終的にはいずれも取引費用の低減に結びつける考察は、著者自身もことわっているように、それを証する具体的な数字がそなわっているわけではなく、結論さきにありきの印象をぬぐえない。これについては、ヒュー・クラーク氏による本書の書評 (*Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol.62, No.1, 2002) でも批判がなされている。第1部との関連においても、第11章で取引費用低減に関してリネージの果たした役割の評価が見られるが、第4章で指摘した地域の有力な一族がもたらした弊害といかに統一的に把握し得るかの説明は乏しいように感じられる。著者は“Conclusion”で宋元時代と現代とを関連づけて考察をおこなうが、その間の明清時代——宗族制

度が福建においてますます発達した時代でもある——が閩南の歴史に占める意味づけとも併せて、著者の今後の考察を待ちたい。

しかし、そうした欲張りな要求を列べたくなるのは、とりもなおさず本書の斬新な視点による刺激が大きいことの証明と言えるように思う。同時に、あらためて言うまでもないことながら、先行研究の評価すべき点をきっちり評価し、そのうえで乗り越えるべき点を明確にして、生産的な議論を展開する著述スタイルにも共感を覚えた。そのことはまた、後の世代の研究者から繰り返し言及され挑戦を受ける先行研究——本書で言えばスキナーのような——がもつ体系性の高さを意味しているのかもしれない。

それはともかくとして、ノース氏の理論に対しても、アジア経済研究の立場からの原洋之介氏による批判に見られるように、「制度変化」の再検討のために、西欧との文化信念の相違を踏まえる必要を指摘し、そして歴史学界の新たなアプローチに注目して、経済取引を媒介するコミュニケーションへの関心を示す論者もいる (『アジア型経済システム』、中央公論新社、2000年)。そうした意味で、このような社会科学との接触によって、伝統文化のルールをあぶり出すことのできる歴史学の重要性をあらためて認識することができたのも、本書による恩恵の一つと言えるかもしれない。

〔付記〕本書については、2001年度から2002年度にかけて、大学院の演習「東アジア地域文化論」で講読をおこなった。その際、本書およびノース『制度・制度変化・経済成果』について、さまざまな意見や疑問を投げかけてくれた院生諸氏に謝意を表したい。また、本書の書評をおこなわせていただいた第5回西日本中国社会史研究会 (於山口大学) にてご意見をいただいた諸先生方にも、この場を借りて謝意を表したい。

(広島大学大学院文学研究科助教授)